

株式会社DTP寄附講座 「知的財産権とビジネスモデル」

「第8回・吉岡純希 (ケアプロ) 様」

氏名：清水 快

学部：総合政策学部 学年：2年

学籍番号: 71504152

CNS: s15415ks

質問1: SFCにおけるFab for everyoneから、ファブと現場を掛け合わせるといった趣旨の元で、現在ファブナースプロジェクトが田中研究会内が看護医療学部と進められていると思いますが、サポートする製品を提供する人（Fab maker）があるからこそプロジェクトが成り立っていると考えています。理想であれば、患者さんと生活している人が患者さんとともに制作されることですが、多くの場合そうではないと考えています。Fabはこのような新しい分野に普及し続けるため、医療機関がこのような手段が可能であると気づくために、どのような持続的な取り組むが必要だとこれまでの経験を踏まえて考えていますか。

質問2: 限られた環境での生活を強いられる入院患者のために、その環境自体をウェアラブル化することを元に、ウェアラブルメディアアートをこれまで活用されてきたと思います。VR技術が進む中では、入院患者が求めるようなシチュエーションをVR内でのコンテンツとして作られていくことが予想できます。ですが、VRヘッドセットをつけて、現実世界から離れるような行為の中、入院患者は果たして一番良いのかと議論ができると思います。最先端のテクノロジーと医療看護の倫理感において、吉岡さんはどのような軸をおいていますか。

質問3: これまでのメディカルアートの活動を一人でやられてきたと書いてありましたが、自分自身がこれまでやってきた経験の中で一番やりがいを感じた瞬間とはどのようなものでしょうか。

質問4: 即存のある入院患者の自己意識を向上するための活動として、「食」などが大きな影響を与えていると考えています。自分自身が入院されていた際には、献立を決めることや自動販売機で購入できる飲料などで励まされたと考えています。しかし、ホスピタルアートは食と違い、コンテンツを選ぶのではなく、コンテンツとのインタラクションをどのように形成するかというものであると思っています。ホスピタルアートにおける自己表現と現代にある治療法の違いについて具体的に説明していただけたらと思います。

質問5: メディアアートを新鮮なものとして入院患者に提供するために、現在新たな体験を作り出すための使用している手法や研究の仕方などがあれば伺いたいです。